

今週のメニュー

■トピックス

◇第10回環境シンポジウム

－神奈川総合高等学校で開催された生徒主体の催しに参加－

■随想

◇古代ヤマトの遠景（63）－【応神王家の時代】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇第10回環境シンポジウム

－神奈川総合高等学校で開催された生徒主体の催しに参加－

3月19日に、神奈川県立神奈川総合高等学校で同学のエコ局が主催する環境シンポジウムに参加しました。同校は今年創立18年目を迎える公立高校で、教育目標に「生徒一人ひとりの個性の伸長を図り、主体的に学び、国際社会の中で共に生き共に育つ高い人格と心豊かな感性を備えた人間を育成する」ことを掲げています。このシンポジウムは生徒会組織のエコ局スタッフが企画し、外部の講師も自分たちで探して交渉して実現した催しで、今回で10回目になります。



神奈川総合高等学校

昨年のエコプロダクツ展にVEC/JPEC 共催で出展したブースを訪れたエコ局の田嶋さんから熱心な誘いを受けて、生徒の自主的な催しに関心を持ち、参加させて頂くことになりました。授業や期末試験の合間にメールでのやりとりを行い、講義する分科会のテーマを「プラスチックのお話しー貴重な石油資源とリサイクルを考えるー」としました。これまでに中学校や高等学校で行った出前授業をベースにした内容で、汎用プラスチックを密度で見分ける実験を行うことから、同校を訪問して事前の打合せを行い、教室を化学実験室に変更して頂きました。

シンポジウム当日、講師の方々が会議室に集まり、校長先生のご挨拶とエコ局のスタッフの紹介を頂きました。分科会は18の講座に分かれ、外部から招いた講師の講座が16、エコ局がリードする討論会等が2で構成されています。地元企業、NGO、NPO、メディア、商工会議所等多くの分野から環境に関連するテーマ募集が行われ、その内容が事前に生徒に知らされていました。同じ講座が2回行われ、生徒はふたつの分科会を受講することが出来るように工夫されています。

いよいよ化学実験室での講義が始まりました。20名弱の生徒が4つの実験台に分かれ、プラスチックの原料である石油資源のことや色々なプラスチックの説明を熱心に聞いてい

ました。その後、用意したPVCを含む汎用プラスチックのサンプルと水、飽和食塩水、50%エタノール水の3種類の溶液を使った密度の差による見分け実験を行いました。手際良く分担して実験するグループ、迷いながら苦労しているグループ等がありましたが全員が正解されました。最後に色々なところで役に立っているプラスチックの実例サンプルを見せて説明すると手にとって確かめたり、目をキラキラさせていました。



その後、講師の方々がそれぞれの分科会を終えて会議室に集まり、揃って次の会場である多目的ホールに向かいました。ここで全体会が行われ、講師全員が壇上に用意された席に半円状に着き、分科会に参加した全生徒と先生方が集まりました。エコ局の司会で始まり、講師ひとりひとりから授業の紹介とシンポジウムの感想等が語られ、ときに笑いや頷き、ときに大きな拍手等を交えて無事に講師全員の挨拶が終わりました。最後に、エコ局を代表して責任者の瀬川さんと講師統括の田嶋さんが立派な胸を打つお礼の挨拶をされました。



このシンポジウムに参加して、講師の皆さんと同様に、生徒主体の素晴らしい企画と受講された生徒の熱心な学びの姿勢に感心させられました。参加された生徒の皆さんがそれぞれの夢を実現するときに、今回聞かれた講師のお話しが少しでもお役に立つことを願っています。(了)

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（63）－【応神王家の時代】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

前回までに、宋書に記録されている倭の五王の動向を見てきた。この記録を以って、倭国が朝鮮半島へ侵攻した証拠だとする考えのあることを先に触れたが、とてもそんなことは考えられないとするのが、ここでの主張である。理由は、

- ① 渡海して他国へ攻め入ることが、どれほどの経済的な負担を強いるかが、侵攻説の論理には欠落している。広開土王碑問題のところで述べたように、国を二分するような大問題に発展するのである。このような状況の中で度々半島侵攻のために出兵したなどは、考えられない。
- ② 倭国制圧のプロセスをどのように考えるのかが重要な視点となるが、古代学においては、西国の制圧が先で、応神王家の五世紀は、東国制圧の時代であるとするのが一般的な解釈である。これに対し、本稿では東国制圧が先で西国制圧は五世紀の出来事であるとしている点で大きく異なっている。しかも、その戦いは極めて熾烈なものであったために、結果的に宋朝の権威を借用せざるを得なかった。

半島侵攻説の場合は、東国制圧と半島侵攻とが同時進行していたと考えられることになるが、基本的に東国制圧については、倭国軍側の負担が比較的小さかったことから、半島侵攻が可能となったということになる。そして、このための大義名分が宋朝のお墨付きだと解釈されることになる。ところが、宋が認めた官爵は倭国の勢力の及ぶ範囲を示すものであり、それらの国々へ倭国が侵攻するのであれば、これは論理矛盾となる。もし、範囲外の百済・高句麗に侵攻するのであれば矛盾はないが、百済とは七支刀に基づく軍事同盟を締結しているとの前提に立てば、この国への侵攻などとても考えられないことになる。では、高句麗かといえば、この時代の高句麗は倭国の歯が立つような国ではなく、このような強国に倭国が戦いを挑むなどは、これも考えられないことになる。

- ③ 書紀雄略天皇九年条に、雄略天皇は新羅の態度がけしからんと云う理由で、諸豪族に命じて新羅攻撃をさせるが、結果的に失敗する話が出てくる。これは史実かという問題であるが、とても史実とは考えられない。理由は、大義名分があまりにも薄弱すぎる点が挙げられる。恐らく書紀の撰述者が倭の五王の記録と、雄略天皇の気性から、有り得そうな話として創作したものと考えられる。

このように五世紀の半島侵攻は、論理的にも物理的にも、ほとんど不可能であると結論されることから、ここでの主張のように、五世紀は西国内乱の時代であり、その制圧のために倭王は懸命の努力をしていたと、解釈してもよさそうだとすることになる。

以上は、倭の五王の記録から見た半島侵攻不可能論であるが、現実に倭国が半島側の要請があるにも拘らず、出兵をしなかったと考えられる記録がある。これは、明示的な史料として残されているものではないが、当時の状況判断から、そのように判断せざるを得ないという史料である。

それは、四七五年に百済が高句麗の長寿王に徹底的に攻撃された事件である。この長寿王は広開土王の息子で、広開土王碑を建てた人物である。中国の各王朝は彼のことを高璉こうれんと記録した。諡号の通り大変な長寿を全うし、中国諸皇帝の絶大なる信頼を得ていた名君である。

朝鮮半島北部を平定し安定化させると、半島全体の制圧が長寿王の目標となってくる。その手始めの戦いが、百済侵攻であった。このときの戦闘で、百済は王都の漢城（現在のソウル近郊）を追われ、約 100km 南の熊津ゆうしん（現在の公州）に都を移すことになる。この戦いは恐らく数年に及ぶ国家の存亡をかけた戦いだったと想定されるが、当然、百済側から倭国へ援軍派兵の要請があったはずである。ところが倭国はこれに応じなかった。倭国側の記録にも百済側の記録にも、そのことが全く記されていないからである。



百済王都の移動

四七五年といえば、倭王武、即ち雄略天皇が上表文を宋の皇帝へ奏上した年の、わずかに三年前のことである。この当時の倭国が西国の平定に成功し、ある程度落ち着きを取り戻していた時代なのか、最後の胸突き八丁の時代だったのかは分からない。何れにしても倭

王武はこの要請を無視した。武にしてみれば、半島の事まで手は回らないが本音だったかもしれない。或いは、七支刀による軍事同盟は、先の出雲王家時代のものであり、そんな昔の同盟に基づいて出兵するなど真っ平御免だ、といった思いが在ったのかもしれない。

なお、書紀の雄略天皇二十一年条に、百済が破れたので久麻那利^{くまなり}を百済王に賜り、百済を再興させた、との記事がある。ここに出てくる久麻那利は熊津のことと考えられていることから、雄略天皇は派兵こそしなかったが、物理的に百済を支援したとの記述である。

しかし、熊津は、現在の公州とされており、韓国忠清南道に位置している都市である。こんな韓国中央部の地方を、雄略天皇の時代に倭国がその支配下に置いていたなどは、とても考えられないことであり、この書紀の記述をそのまま認めることは無理である。恐らく、書紀の撰述者が百済の王都移転を後から知り、これまでの倭国と百済との関係から、久麻那利なる土地を百済王に贈ったとする事績を創作し、記載したのであろう。要するに、雄略天皇は協力も派兵もしなかったのである。

しかし、高句麗の南下政策が具体的に動き出してきた、まさにそのような状況の中で、倭国が半島への関与政策を変えたという事実は、百済だけでなく加耶地方、更には新羅にも衝撃を与えた。六世紀に入ると、覚悟を決めた新羅は国家としての形を整え、落ち目の百済を尻目に昇竜の如くに強大化して行く。更に、かつて任那と呼ばれていた伽耶地方の帰趨問題が、半島南部の最大関心事となってくる。伽耶地方は小国の集まりであり、倭国のこの地方におけるプレゼンスで、なんとか和平を維持し均衡を保っていた。

しかし、倭国の方針転換で伽耶地方は自らの力で新羅・百済に対抗して行かなければならなくなった。彼らはあまりにも長い間、平和であり過ぎた。危機が迫ってから急に連合体制を構築するといった動きを始めるが、所詮泥縄である。結果的に伽耶地方は新羅に併合され、その時に倭国の任那宮家も消滅した。この事件は六世紀の継体王家時代に起きたことなので、この王家の諸問題を検討する時に、も少し詳しく触れることにする。

(つづく)

前回：[「古代ヤマトの遠景」\(62\) - 【倭の五王問題\(3\)\] -](#)

「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

■ 編集後記

東京の桜も火曜日の暴風雨に耐え、咲きそろってきました。毎年、桜は同じように咲いているはずなのに、悲しいことに去年の桜の記憶はあまり無く、むしろ「桜の頃の記憶」が甦ってきます。

1年経って改めて様々な報道に接していた先日、「早く復旧するといいね」という言葉を聞き、反射的に「復興？」と聞き返してしまいました。

「あっ、そうそう」と会話は続いたのですが、後から考えると、その人には「今、まだ不便な生活を強いられている人がいて、まず復旧あつての復興」という想いがあったのかもしれない。もう何日も過ぎてしまい、今さら尋ねてみるのもはばかられ、私は、世間に溢れている『復興』という言葉や、まるで流行語のように押し付けてしまったのではないかと、心にひっかかったままになってしまいました。

桜の花、一輪一輪は小さいですが、みんなこっちを向いて咲いています。見上げればきっと私たちが元気づけてくれることでしょう。(漢)



■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp
